



TITLE:

心理研究部門(I 研究所の概要)

AUTHOR(S):

小嶋, 祥三; 松沢, 哲郎; 藤田, 和生; 友永, 雅己; 南雲, 純治

CITATION:

小嶋, 祥三 ...[et al]. 心理研究部門(I 研究所の概要). 霊長類研究所年報 1993, 23: 17-21

ISSUE DATE:

1993-09-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/164505>

RIGHT:

- 6) Nakamura, K., Mikami, A., and Kubota, K. (1992): Activity of single neurons in the monkey amygdala during performance of a visual discrimination task. *J. Neurophysiol.*, 67:1447-1463.

報告・その他

—英文—

- 1) Kubota, K. and Kawahira, K. (1992): Role of GABA_B inhibition in the primate motor cortex. *Proc. of 2nd Int. GABA_B Sympo., Pharmacol. Communication*, 2:172.
- 2) Mikami, A. (1993): Visual discrimination and memory in the temporal association cortex. *Abstr. for Symposium of Dynamics of perception*. 13.
- 3) Sawaguchi, T., Ando, I., Yamane, I., and Kubota, K. (1992): GABA_B receptors and cognitive functions mediated by the prefrontal cortex of monkeys. *Proc. of 2nd Int. GABA_B Sympo., Pharmacol. Communication*, 2:173.

—和文—

- 1) 三上章允 (1993):側頭連合野における高次視覚情報処理. *Vision*, 5:19-26.
- 2) 三上章允 (1993):サルの大脳皮質の視覚情報処理, 視覚の進化と脳 (三上章允編) pp:105-130.
- 3) 澤口俊之 (1992):認知心理学と神経科学を結ぶ1モデルとしてのフレームモデル. *Imago*, 3:178-191.
- 4) 澤口俊之 (1992):脳の進化. *からだの科学*, 168:34-42.
- 5) 澤口俊之 (1992):前頭葉の進化. *神経研究の進歩*, 37:14-25.

学会発表

—和文—

- 1) Kubota, K. (1992): Effects of bicuculline on learning a hidden object pick-up task in infant monkeys. *Soc. Neurosci. Abstr.*, 18:103.11.
- 2) Sawaguchi, T., Yamane, I., and Kubota, K. (1992): Involvement of D1 dopamine receptors in premotor cortical functions in

- monkeys. *Soc. Neurosci. Abstr.*, 18:355.11.
- 3) Sawaguchi, T., Yamane, I., and Kubota, K. (1992): Activation of D1 dopamine receptor in the premotor cortex facilitates the neuronal activity for reaching movement. *Neurosci. Res.*, 17S:220.
- 4) Yamane, I., Sawaguchi, T., and Kubota, K. (1992): Muscimol injections into the premotor cortex induced directional errors in memory-guided reaching movements. *Neurosci. Res.*, 17S:221.
- 5) Sawaguchi, T. (1992): Prefrontal cortex, memory map and movement. *Japanese J. Physiol.*, 42S:5.
- 6) Nakamura, K., Matsumoto, K., Mikami, A., and Kubota, K. (1992): Visual response properties of neurons in the temporal pole of monkeys. *Soc. Neurosci. Abstr.* 18:147.

—和文—

- 1) 澤口俊之 (1992):真猿類における大脳新皮質の進化要因:比較法による検討. 第8回霊長類学会大会. *霊長類研究*, 8(2):182.

心理研究部門

小嶋祥三・松沢哲郎・藤田和生・
友永雅己・南雲純治⁹⁾

研究概要

A) チンパンジーの聴覚と音声に関する研究

小嶋祥三

音声知覚における文脈効果, プロトタイプ効果を検討した。また音の出る物体を用いて, 感覚間の見本合わせ課題により, 聴覚-視覚の統合機能, 作業記憶などを検討した。

B) チンパンジーの身体知覚に関する研究

小嶋祥三

動作模倣研究の発展として, 自ら見ることの出来ない身体部位(顔面・頭部)の知覚の研究を通して, 身体像を検討した。

C) チンパンジーの認知的・言語的機能の比較 認知科学的研究

松沢哲郎・友永雅己・
イバー＝イバーセン²⁾・
伏見貴夫³⁾・日上耕司⁴⁾

チンパンジーとヒトを対象に認知的・言語的機能の比較研究を行った。文字や数の体系とその記憶、描画行動、社会的コミュニケーション、ゆびさしや動作サイン、情動発達などを研究している。

D) 野生チンパンジーの道具使用と認知発達

松沢哲郎

西アフリカ・ギニアとコートジボワールの野生チンパンジーを対象に、道具使用にみられる認知発達と文化を現地のマノン族の子どもと比較した。

E) 霊長類の視知覚に関する比較心理学的研究

藤田和生

アカゲザルとチンパンジーを対象に、錯視知覚の分析をおこない、ヒトやハトと比較した。

F) スラウェシマカクの種の認知

藤田和生・渡辺邦夫5)

インドネシア・スラウェシ島とジャワ島において、サルの写真に対するスラウェシマカクの好みを調べ、雑種形成のメカニズムについて考察した。

F) ニホンザルの視覚探索

藤田和生・金沢創6)

視覚探索課題を用いて、ニホンザルの図形や線画の知覚の特徴を分析した。

G) チンパンジーの視覚探索における探索非対称性

友永雅己

複合図形などを用いて、特定の要素を含む刺激を標的とした場合と妨害刺激にした場合で視覚探索課題遂行に非対称性が認められた。

H) チンパンジーの視覚探索における刺激性制御の研究

友永雅己

odd-item型の視覚探索課題の検討の結果、標的刺激の背景からの知覚的pop-outが課題遂行上の重要な手がかりであることが明らかになった。

I) 霊長類の相貌認知における上下反転効果

友永雅己

ニホンザルを被験体として、感覚性強化法および単純継時弁別課題を用いて、相貌認知における上下反転効果について検討を行った。

J) チンパンジーによる物体構成型条件性弁別の研究

友永雅己・伏見貴夫

チンパンジーによる3次元物体の組み立て場面に条件性弁別を導入し、訓練された関係以外の刺激間関係の形成を調べた。

K) ヒトにおける刺激等価性形成

友永雅己

健常なヒトを被験者として、条件性弁別における刺激等価性の形成について検討を行った。

L) 霊長類行動実験用システムの開発

南雲純治

画像処理ソフトウェアを作成し、自然画像を用いた実験のためのシステムを開発した。

M) チンパンジーにおける要求・拒否行動の形成

伏見貴夫・友永雅己・小嶋祥三

チンパンジーに対して人工言語を用いた要求・拒否行動の訓練を行い、コミュニケーションにおける人工言語使用を制御する変数の分析を行った。

N) 霊長類における社会的相互作用の実験的分析

日上耕司

複数個体の競合場面、協同的に行動した時に個々の利益が最大になる場面、共同作業が必要な場面における社会的相互作用の実験的分析を行った。

総 説

一和文一

- 1) 小嶋祥三(1992): 人類が最初に発した言葉は? 歴史読本ワールド, 11月号: 108-114.
- 2) 松沢哲郎(1991): 動物の発達と人間の発達. 児童心理学講座. 金子書房.
- 3) 松沢哲郎(1992): 携帯用コンピューターによる精神作業検査. ヒマラヤ学誌 3: 205-217.
- 4) 松沢哲郎(1992): 意識の進化: 動物の意識. 生体の科学, 43(1): 7-11.
- 5) 松沢哲郎(1992): チンパンジーの「言語」. 臨床科学, 28(6): 731-737.
- 6) 松沢哲郎(1992): チンパンジーの保護と愛護. 発達, 51: 102-111.
- 7) 藤田和生(1992): ヒトの知能は動物の知能より優れているか? 最新脳機械論, pp.64-73, 学習研究社.

論 文

一英文一

- 1) Kojima, S. (1992): Hearing and speech perception in the chimpanzee. In: Topics in
- 1) 文部技官 2) 招へい外国人学者
- 3) 4) 日本学術振興会特別研究員
- 5) 野外観察施設助手 6) 大学院生

Primate, Vol.1, Human Origins (eds. by Nishida et al.), pp.249-255, University of Tokyo Press, Tokyo.

- 2) Jitsumori, M. & Matsuzawa, T. (1991): Picture perception in monkeys and pigeons: Transfer of rightside-up versus upside-down discrimination of photographic objects across conceptual categories. *Primates*, 32(4):473-482.
- 3) Fujita, K., Blough, D. S., & Blough, P. M. (1993): Effects of the inclination of context lines on perception of the Ponzo illusion by pigeons. *Animal Learning & Behavior*, 21: 29-34.
- 4) Mikami, A. & Fujita, K. (1992): Development of the ability to detect visual motion in infant macaque monkeys. *Developmental Psychobiology*, 25:345-354.
- 5) Tomonaga, M. (1993): Tests for control by exclusion and negative stimulus relations of arbitrary matching to sample in a symmetry-emergent chimpanzee. *Journal of the Experimental Analysis of Behavior*, 59: 215-229.
- 6) Tomonaga, M. (1993): Use of multiple-alternative matching-to-sample in the study of visual search in a chimpanzee (*Pan troglodytes*). *Journal of Comparative Psychology*, 107: 75-83.

—和文—

- 1) 井上徳子・日上耕司・松沢哲郎 (1992): チンパンジー乳児における愛着の研究—Strange Situation における行動と心拍変化—。発達心理学研究, 3(1): 17-24.
- 2) 南雲純治・浅野俊夫(1992): ハードウェア割り込み利用によるソフトウェアタイマの作成。愛知大学情報処理センターニュース [コム], Vol.4, No.1:13-38.
- 3) 田中正之(1991): チンパンジー(*Pan troglodytes*)による対象分類とその般化。動物心理学研究, 41(2): 100-115.

報告・その他

—和文—

- 1) 小嶋祥三(1993): 大型類人猿の研究から。早稲田学報, 4月号: 11-12.

- 2) 松沢哲郎(1992): チンパンジーの死と死児の世話。発達, 50: 95-104.
- 3) 松沢哲郎(1992): シカゴ科学院シンポジウム「Understanding chimpanzees」報告とチンパンジーの保護。霊長類研究, 8(1): 103-106.
- 4) 松沢哲郎(1992): 追悼・今西錦司—「初登頂」の精神。科学朝日, 52(8): 122-127.
- 5) 松沢哲郎(1992): アンネ・フランクとチンパンジー。発達, 53: 87-95.
- 6) 田中正之・松沢哲郎 訳(1992): チンパンジーの行動目録。霊長類研究 8(2):123-152. (Goodall, J. (1989): Glossary of chimpanzee behaviors. The Jane Goodall Institute)

学会発表

—英文—

- 1) Matsuzawa, T. (1992): Ai: The chimpanzee mind, Franklin and Marshall College Colloquium, 1992.2.29.
- 2) Matsuzawa, T. (1992): The visual world of a chimpanzee. University of Pennsylvania Colloquium, 1992.3.2.
- 3) Matsuzawa, T. (1992): The chimpanzee mind: Field and Laboratory studies of cognition and symbolic behavior in chimps, UCLA Cognitive Science Program, 1992.3.4.
- 4) Matsuzawa, T.(1992): The chimpanzee mind: cognitive abilities in captivity and in the wild. The XXV International Congress of Psychology. International Journal of Psychology, 27:424.
- 5) Matsuzawa, T. (1992): Cognitive development in stone-tool use by wild chimpanzees in Guinea. The XXV International Congress of Psychology. International Journal of Psychology, 27:428.
- 6) Matsuzawa, T. (1992): Concept of number in a chimpanzee. The XXV International Congress of Psychology. International Journal of Psychology, 27:428.

—和文—

- 1) 小嶋祥三(1992): チンパンジーの視聴覚間統合。第8回日本霊長類学会大会。霊長類研究, 8(2): 223.

- 2) 小嶋祥三(1992): チンパンジーの音声知覚: 文脈効果. 第56回日本心理学会大会. 発表論文集: 854.
- 3) 伏見貴夫・友永雅己・小嶋祥三(1992): チンパンジーにおける要求・拒否行動の訓練と分析. 第56回大会日本心理学会. 発表論文集: 897.
- 4) 関根雅夫・小嶋祥三・寺尾恵治・正高信男(1992): カニクイザルにおける母子分離の生理的, 免疫的, 行動的影響. 第8回日本霊長類学会大会. 霊長類研究, 8(2): 224.
- 5) 松沢哲郎(1992): 家族とコミュニケーション: 動物生態の視点から. 第9回日本家族心理学会大会. 発表抄録集: 13.
- 6) 松沢哲郎(1992): 野生チンパンジーの子どもの死と母親による世話. 第29回日本アフリカ学会学術大会.
- 7) 松沢哲郎(1992): チンパンジーの視覚世界. 第1回日本視覚学会大会.
- 8) 松沢哲郎(1992): 野生チンパンジーの石器使用とその発達過程. 平成4年度人類動態学会研究会.
- 9) 松沢哲郎(1992): 野生チンパンジーの石器使用にみる認知発達. 第8回日本霊長類学会大会. 霊長類研究, 8(2): 197.
- 10) 外岡利佳子・松沢哲郎(1992): チンパンジーにおけるラテラリティの発達の变化. 第56回日本心理学会大会. 発表論文集: 477.
- 11) 友永雅己・松沢哲郎(1992): チンパンジーにおける「数」の処理: 計数対象の短時間呈示の効果. 第56回日本心理学会大会. 発表論文集: 898.
- 12) 松沢哲郎(1993): 野生チンパンジーの石器使用の発達: ヒトの子どもとの比較. 第4回日本発達心理学会大会. 発表論文集: 242.
- 13) 外岡利佳子・松沢哲郎(1993): チンパンジーおよびヒト乳児における手使用の発達の比較. 第4回日本発達心理学会大会. 発表論文集: 243.
- 14) 藤田和生(1992): マカクザルの種の認知—その手掛かりの分析—. 第8回日本霊長類学会大会. 霊長類研究, 8(2): 201.
- 15) 藤田和生(1992): アカゲザルにおけるポンゾ錯視の知覚. 日本心理学会第56回大会. 発表論文集: 608.
- 16) 藤田和生(1992): PC9801を用いて—累積記録の描画と自然画像の提示. 第10回日本行動分析学会.
- 17) 友永雅己(1992): ニホンザルは回転したサルの写真をどのように知覚するか: 相貌認知との関連で. 第8回日本霊長類学会大会. 霊長類研究, 8(2): 202.
- 18) 友永雅己(1992): チンパンジーにおける Visual Search: 多選択肢見本合わせ法による検討. 第52回日本動物心理学会大会. 予稿集: 28.
- 19) 友永雅己(1992): 「言語」の成立. 日本動物学会関東支部シンポジウム: サルからヒトへ—遺伝子から行動まで. 生物科学ニュース, 6月号(No.247): 18.
- 20) 友永雅己(1992): チンパンジーにおける「数」の処理: 計数対象の短時間呈示の効果. 第56回日本心理学会大会. 発表論文集: 898.
- 21) 友永雅己(1992): Sidman型等価クラス形成に及ぼす定義的特徴(反射性・対称性・推移性)の逆転訓練の効果. 第10回日本行動分析学会大会. 発表論文集: 27-28.
- 22) 南雲純治(1993): 動物行動実験における視覚刺激呈示及び反応入力システムについて. 第15回生理学会技術研究会.
- 23) 田中正之(1992): チンパンジー(*Pan troglodytes*)による自発的分類. 第52回日本動物心理学会大会. 予稿集: 28.
- 24) 田中正之(1993): チンパンジーによる非知覚的手がかりに基づく分類. 第4回日本発達心理学会大会. 予稿集: 162.
- 25) 木下昌也・田中正之・太田裕彦・俣野彰三(1992): チンパンジーのT型迷路課題の遂行と手の使用. 第8回日本霊長類学会大会. 霊長類研究, 8(2): 202.
- 26) 木下昌也・田中正之・太田裕彦(1992): チンパンジーのT型迷路課題の遂行. 第52回日本動物心理学会大会. 予稿集: 29.
- 27) 金沢 創・蛭川 立(1992): 大学生が泣くことの記載的研究. 第1回日本性格心理学会大会. 発表論文集: 32.
- 28) 山口真美・金沢 創(1993): カップルのリズムの同調と歩行速度の関連. 第4回日本発達心理学会大会. 発表論文集: 144.
- 29) 橋彌和秀(1992): メンタル・ローテーション

のプロフィールに見られる視覚と身体感覚との相互作用. 日本視覚学会1992年夏期研究会.

- 30) 橋本和秀(1992): 飼育下チンパンジーにおける乳児期の行動目録. 第4回日本発達心理学会大会. 発表論文集: 87.
- 31) 伏見貴夫(1992): ニホンザルの要求行動の分析—要求相手についての分化—. 第52回日本動物心理学会. 予稿集: 17-18.
- 32) 伏見貴夫(1992): チンパンジーにおける要求・拒否行動の訓練—“機能語”の獲得とその効果の検討—. 第10回日本行動分析学会. 発表論文集: 21-22.
- 33) 井上徳子・日上耕司(1992): チンパンジー乳幼児における愛着の研究—生後2年間の発達. 第56回日本心理学会大会. 発表論文集: 73.
- 34) 日上耕司(1992): チンパンジーの社会的コミュニケーションについて. 第93回中部人類学談話会.
- 35) 中村伸・後藤俊二・峰沢満・橋本道子・日上耕司(1992): ニホンザル嵐山放飼育群におけるスギ特異的IgE抗体の季節動態. 第8回日本霊長類学会. 霊長類研究, 7(2): 211.
- 36) 井上美穂・竹中晃子・光永総子・大沢秀行・杉山幸丸・野崎真澄・待田昌二・日上耕司・Aly Gaspard Soumah・佐倉統・竹中修(1992): GTジヌクレオチド多型解析法によるニホンザルの父子判定; 放飼グループにおけるオスの年齢・順位変化と子ども数. 第11回日本動物行動学会大会.

社会研究部門

加納隆至・大澤秀行・鈴木 晃

研究概要

- A) 中央アフリカのザイール森林における野生ボノボの社会及び行動の研究

加納隆至・橋本千絵¹⁾

ザイール共和国ジョル地区ルオ学術保護区(ワンバ森林及びイロンゴ森林)においてボノボ(ビグミーチンパンジー)の野外研究を行っている。目下のところ、ザイールの政情が不安定なため、1992年9月以降現地調査は中断しているが、データのとりまとめは進行中である。

- B) コンゴにおける野生チンパンジーおよびゴ

リラの研究

加納隆至

コンゴ共和国東北部のモタバ川流域で野生チンパンジーとゴリラの分布と密度に関する広域調査を行った。イ) 聞き込みによるチンパンジーとゴリラの所在の有無と村人による狩猟・捕食の実状、ロ) 生息地の植生、ハ) 巣及び他の痕跡の分布と密度、ニ) 造巣のための植物利用、等について研究を行った。

- C) ウガンダにおける野生チンパンジーの研究

橋本千絵²⁾・加納隆至

ウガンダ西部のカリンズ森林保護区において、橋本が中心となってチンパンジーの生態学的研究を行った。コードラート法により生息地の植生調査を行い、直接観察や巣・食痕・糞等の痕跡の分布から、チンパンジーの生息地利用の分析を行う一方、ハビチュエーション(人付け)を進めた。

- D) 性淘汰、社会構造に対する要因としての霊長類メスの繁殖戦略

大澤秀行・光永総子²⁾

霊長類における性淘汰、及び社会構造に影響を及ぼすメスの性行動を研究している。メスの生殖生理学的な解析が重要であるため、生理学研究と共同して、これまで放飼場やグループケージ飼育ニホンザルについて調べてきた。今後野外研究に応用するため、排泄物中ホルモン

測定による性腺動態把握を共同で開発中である。

- E) アフリカ乾燥サバンナにおけるオナガザルの野外研究

大澤秀行

カメルーン北部のカラマルエ国立公園において、パタスザルとミドリザルの野外研究を1984年より続けている。1992年はパタスモンキーの繁殖期に社会変動と繁殖行動の関係について資料を収集した。

- F) オランウータンの社会、生態学的研究の続行とまとめ

鈴木 晃

1983年より、インドネシア国東カリマンタンのクタイ国立公園で行ってきたオランウータンの野外調査を継続。(1992年12月-1993年1月)。さらにこれまでの資料と結果のまとめに取り組んだ。

バジャジャラン大学との共同研究のための体制づくりのための準備もこの間に行った。

- G) 上信越ニホンザルの地域社会学的研究